

未熟児室退院後の電話訪問導入の効果 ～育児不安軽減に向けて～

キーワード：育児不安・電話訪問

北2階 未熟児室 ○白木佐知子 本田美穂子 狩川周子

I はじめに

核家族化の進展や家族・地域の子育て機能の低下に伴い、育児不安の増加が問題視されている。その中で、特にNICU退院児の場合、入院による母子分離によって母子の適応過程が不十分であること、また、ハイリスク児を産んでしまったという母親の罪悪感があることなどから、児と共に産科病棟を退院した母親よりも育児不安は強いといわれている。退院直後は病院から家庭での育児に移行する過渡期であり、退院前に退院指導を受けてもいざ医療者の手を離れて行くとすると、様々な不安が生じてくる。その不安内容は些細な事が多いとされており、また、先行研究から母親が医療機関に電話をかけることに躊躇していることも示されていた。そこで当院未熟児室においても電話訪問が退院後の育児不安の軽減に有効であると考え実施したところ効果が得られたので報告する。

II 研究目的

1. 当院未熟児室の電話訪問による母親の育児不安軽減の効果の有無を明確にする。
2. 電話訪問を行なう事で些細な育児不安を気軽に相談できる。
3. 電話訪問の日時を決めておくことで母親が不安なことを整理して尋ねることができる。

III 研究方法

1. 調査期間：平成16年6月12日～10月21日。電話訪問日は退院後平均6日目。
2. 調査対象：当院未熟児室を平成16年6月7日～10月18日に退院した児の母親23人である。回収率100%、有効回答20人(87%)であり、その平均年齢は29.4歳、里帰り育児は14人(70%)であった。
3. 調査方法：退院前に電話訪問の希望の有無と電話訪問の希望日(先行研究から退院後3～10日とした)を母親に確認し、その希望日に受け持ち看護師が質問用紙を用い

て電話訪問を行った。

その後の再来日に母親に電話訪問に対するアンケート調査を行った。アンケート内容は産後の母親の心配事に関する先行研究から構成した不安の20項目毎に電話訪問による不安の変化を5段階にしてチェックしてもらい、その不安の変化を点数化した。また、研究目的の2・3に対する質問を行い、いいえで行った。そのアンケート結果を統計学的に処理し、t検定においては $p < 0.05$ にて有意差とした。

4. 倫理的配慮

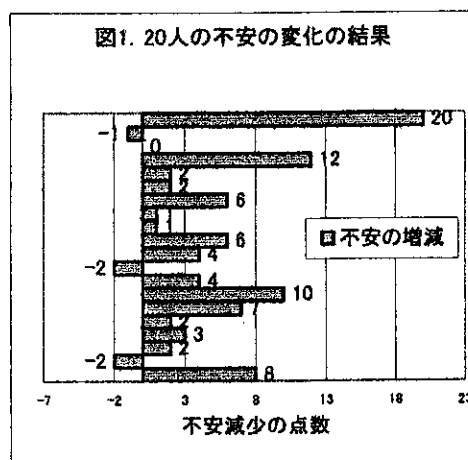
研究対象者へは研究目的及び意義を伝え、自由意思による参加とした。個人が特定されないよう配慮がされることを伝えた。

IV. 結果

1. 電話訪問の効果について

図1から電話訪問によって少しでも不安が減った人は20人中16人(80%)であり、それは明らかな有意差を認めることができ

図1. 20人の不安の変化の結果



た。 $(p < 0.01)$ しかし、反対に僅かではあるが不安が増えた人を3人認めた。それは『乳房トラブル』や『鼻汁、鼻詰まり』『睡眠不足』などについての不安が点数をあげていたが、3人とも些細なことでも気軽に相談できたと答えていた。電話訪問前後で

図2. 些細なことが気軽に相談できたか

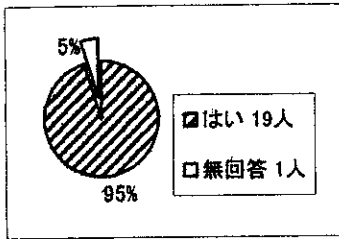
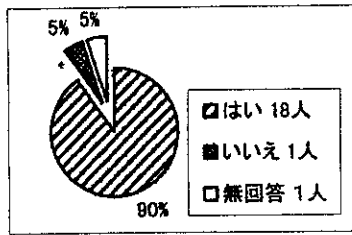


図3. 電話訪問の日時を予め設定しておくことで質問することが整理できていたか



不安の変化がない母親も1人認めたが、「家族が病気になった時の対応がわかって安心した」という意見を書かれていた。

些細なことが気軽に相談できましたかという問いには20人中19人が「はい」と答えていた。(無回答1人)

電話訪問の日時を予め設定しておくことで質問することを整理できたかという問いには20人中18人が「はい」、1人は「いいえ」と答えていた。(無回答1人)「いいえ」の母親も不安の変化の結果では不安は減少していた。

アンケートの中で母親から「細かなことでも丁寧に聞いてくれて安心した」「定期的に電話訪問してほしい」「24時間電話相談受け付けているので心強い」などの電話訪問に対する意見が得られた。

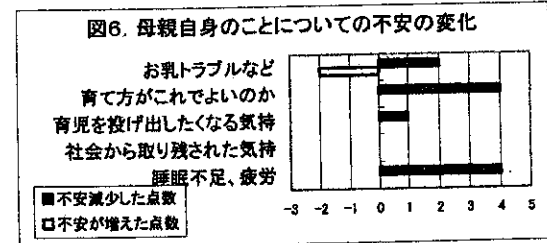
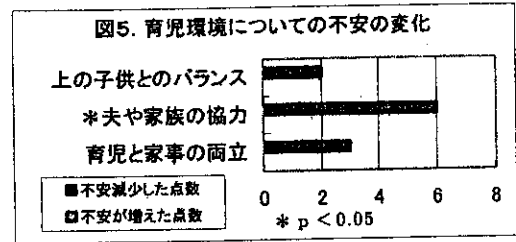
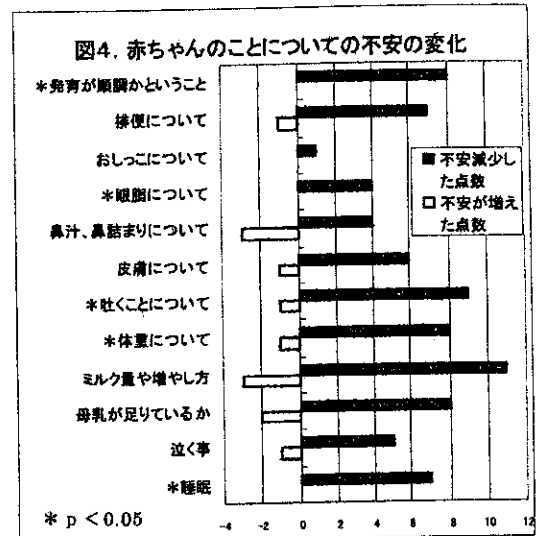
2. 不安の内容について

母親全体の約7割に何らかの不安が存在していた。赤ちゃんのことについては、約9割の母親に何らかの不安が存在していた。その中の項目別ではほとんどの項目で電話訪問による不安減少がみられたが不安が増えた項目もあった。特に『発育が順調かということ』『眼脂について』『体重について』『睡眠について』『吐く事について』の5項目においては有意に不安が減少していた。

($p < 0.05$) 実際の電話訪問でも赤ちゃんの身体や反応が正常なのかというような不安が多かった。不安の訴えを受け止めて傾聴し、あまり特別視せず普通の赤ちゃんと同じように接してよいことなどを伝えた。また、個別の質問も多くそれに対応した相

談や指導を行い、24時間未熟児室が電話相談していることをアピールした。

育児環境に関する不安は母親の約6割に存在していた。項目別には3項目ともに電話訪問による不安減少が認められ、特に『夫や家族の協力』については有意に不安の減少が図れていた。($p < 0.05$) 電話訪問の実際の中では、多くの母親が「家に帰ってからが心配」というような不安を抱いていたため、家族の役割分担などを一緒に考えたりして思いの傾聴に努めた。



母親自身についての不安は母親の約9割に何らかの不安が存在していた。しかし、『お乳トラブル』においては不安が増えたという母親もおり、また、ここでは全体的に電話訪問による不安の減少は僅かであった。実際の電話訪問においても母親自身の不安を訴えることは少なかった。

V. 考察

今回、電話訪問により母親の育児不安の軽減へとつなげることができたと考える。

また、電話訪問の日時を決めておくことで質問を整理し、些細な疑問や不安を解消できる良い機会をつくれたと考える。質問を整理できない場合でも看護師が具体的に確認していくことで不安軽減につながっていると考える。些細な不安の積み重ねが育児放棄へとつながっていく為、先行文献を参考に退院後早期の電話訪問を行った事は母子支援につながったといえる。

『睡眠』などの生活リズムについての不安は未熟児室入院中の様子を細かく伝えることで解決でき、『眼脂・』『吐く・』なども口頭での指導だけで解決できるものも多かった。加藤は「退院すると同時に母親は自ら判断し対処しなくてはならない」¹⁾と述べており、退院前の指導不足も考えられ、今後の退院指導の充実を図っていく必要がある。

『発育が順調か』『体重・』などに対して特に効果が得られたのは未熟児室を退院する児の母親が成長発達に対する不安が強いためだと考えられる。実際の電話訪問ではこれらの不安に対しては支持的アドバイスを中心に行っていたが、これは電話訪問することが竹部らのいう「医療スタッフに見守られているという安心感を提供し、電話訪問時のスタッフの励ましや母親の育児努力の肯定によって母親に育児に対する自信を持たせ得る」²⁾ということにつながると考えられた。

今回里帰り育児が多く『夫や家族の協力』は十分に得られていたため、母親自身も肉体的・精神的にもどうか安定していたと思われる。しかし、里帰りから戻った後の不安は多く聞かれており、丸山が「褥瘡はサポートしてくれる人の存在によって感情を表出し受容されることによって不安を減少させる」³⁾と述べていることから、退院後の母親の育児不安にはキーパーソンである家族の影響の大きさが示唆され、父親に対して母親のキーパーソンとしての役割意識を高めたり、また、母親に対して育児サークルや育児相談など地域の育児支援の活用について情報提供を行うなどして里帰り後のサポートの存在を示す必要がある。

母親自身についての不安を十分に表出し軽減できなかったのは、母親自身にまだ余裕がなく自分の事に気が向いていないことが考えられる。

また、不安が増した原因としては、サポ

ート体制や母親の性格、児の状況などによって母親の持つ不安の大きさには個人差があり、そのような違いに対応できなかったことや看護師のコミュニケーション技術の未熟さも考えられる。また、『乳房トラブル』『鼻詰まり』などは直接的指導が必要なことが多く、また、『睡眠不足』など話すだけでは解決困難なものもあり、電話訪問の限界も考えられる。そのため日頃からのコミュニケーション技術の向上と個別性のある指導が必要不可欠であるとともに、母親へ乳房外来などを紹介したり、保健師訪問へ看護添書を送るなどして積極的に地域との連携を図ることが重要であると考えられる。

VI. 結論

1. 電話訪問は些細な疑問や不安も相談でき未熟児室退院の児をもつ母親の育児不安を軽減するために有効な手段である。
2. 特に未熟児室退院の児をもつ母親は成長発達に対する不安が強い。そのため、肯定的な関わりを行い、成熟児と同じように育ててよいことや未熟児室が24時間電話相談できることを伝えるなどして母親に安心感を与えることが重要である。
3. 多くの母親が里帰り後の不安を抱いており、家族や未熟児室だけでなく地域の育児サポートの存在を具体的に示すなどして母親の孤独感の軽減を図ることが重要である。

VII. おわりに

今回、電話訪問の有効性について確認することができた。今後も電話訪問などを取り入れ継続看護に努めていきたい。

引用文献

- 1) 加藤尚美：新生児訪問活動の意義、ペリネイタルケア、17(5)、6-9、1998
- 2) 竹部君代美ほか：NICU退院後の電話訪問時期とその効果に対する検討、熊本県母性衛生学会雑誌、第4巻
- 3) 丸山知子ほか：産褥期の意識に関する調査研究(第1報)、母親の心配および関心事項についての検討、母性衛生、4(27)、p 717、1986

参考文献

1. 花沢誠一 母性心理学、第1版第8刷 医学書院2003
2. 島田三恵子ほか：産後1ヶ月間の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査、小児保健研究60(5)、671-679、2001
3. 岩本真由美ほか：未熟児退院後の電話訪問、小児看護、153-155、1993